

第六講 現代の歴史学の変遷

【第五講レジメ講評】

レジメ課題：「何故、歴史は国民（民族）史として語られるのか。」

講評：まず、歴史を国民史として扱うほうが理解しやすい、共感しやすいというレポートが目についた。これは国民国家や民族という枠組みが既に存在しており、その枠組みの中で生活し、教育を受け、日々のニュースに接してきたという事実が背景にあるのだろう。また、小学校以来国民史という形で歴史の授業を受けてきたために、歴史を考え・理解するための枠組みが既に出来上がってしまっているという事情が働いているのだろう。そこから歴史は国民史として語らざるを得ないという歴史観の縛りが生まれてくることになる。ある種の同質性、共通性、類似性の共有が強調されることになる。レポートでよく指摘されていたのは文化・風俗・習慣・国民性・歴史の同質性・類似性などのである。ここからはそのような共通な文化や歴史を持つ者同士の理解のしやすさ、親近感、共属意識の共有といった感情が抵抗なく働いているのだろう。

このような感情の素朴な産物として、自分の国を知りたいとか自分が属している民族を知りたいというごく自然な感情が生まれてくることになる。しかし、自国や自民族とは異なる他者の存在をどのように意識し、自らの歴史の中に取り入れてくるのが重要な課題となる。他者は敵なのか、ズル賢い競争者なのか、それともより大きな世界を共有し合うパートナーなのか。

ここから国民としてのアイデンティティー構築としての国民史の役割が指摘される。つまり国民国家が近代という歴史の産物であるということから生じてきた必要性に目を向けたレポートが出てくる。近代以前には国民、民族という意識が果たして存在していたのか、あるいは現代におけるほど強固に意識されていたのかという問題が横たわっている。外の権力体に対して自らの権力体を強固なものに構築するためには国民史は必要であったというわけである。それは国家の正当性を主張する根拠となり、国民の間に統一感・意識を構築し、国民統合を容易に促進する装置としての

国民史ということになる。国民国家に国民を縛り付けておくためには国民としての共通の記憶が必要であり、そのためには国民史は極めて有効であったという考えがある。また、19世紀のドイツで生まれ、欧米諸国に広まり、日本にも伝えられた近代歴史学の産物であったという指摘もレポートには見られた。つまり国民史が近代において人為的に構築された歴史であり、一定の、つまり国家・民族の正当性を主張するという方向を持っているという側面に目を向けざるを得ない。

そこで、残された問題はそのような国民史におけるマイノリティーをどのように評価していくのか、マジョリティーがなぜ形成され、人々はそのマジョリティーに安住してしまっているのかが問われることになる。多くのレポートに欠如していたのはマイノリティーへの視点である。

以下、特徴的なキーワードを列挙しておく。

「国民国家」「国民史」「自民族」「理解」「他民族」「相違」「文化」「風俗」「習慣」「国民性」「歴史」「便宜性」「近代歴史学」「アイデンティティー」「統一感」「共通の記憶」「国民統合」「権力の正当性」・「国のまとまり」「国による統制」

【今回のレジメ課題】百年戦争について知っていることを述べよ。

大きな物語の誕生（国民史）

外交史

文化史（ブルクハルトやホイジンハ）

社会経済史

社会史

マンタリテの歴史

国民史の人為性の認知

言語論的転回

ペロポネソス戦争：前431年～前404年

アテナイ帝国主義に対する恐怖と反感が原因

これはトゥキュディデスの言語によってつくられた事実ではないのか？

アルキダーモス戦争（前 431 年～前 421 年）とイオニア戦争（前 412 年～前 404 年）の間にニキアスの平和（前 421 年～前 413 年）とシシリー遠征（前 415 年～前 413 年）が介在している

アテナイに対する戦争原因 Casus Belli の不当性はスパルタ自身認めている

アテナイ帝国をめぐる『ヒストリア』誌上での論争

親アテナイ派の存在と富裕者層と民衆層の対立、寡頭派と民主派の対立←冷戦のイメージ

↓

トゥキュディデスの言葉がペロポネソス戦争を作りだした

問題はペロポネソス戦争は実態として存在していたのか？それとも歴史家の観念の中でのみ存在しているのか？

同様に百年戦争は歴史上存在しているのか？

シェークスピアの問題：

「ジョン王」「リチャード 2 世」「ヘンリー 4 世」「ヘンリー 5 世」

1360 年のカレー条約でイギリスの勝利に終わる

「ヘンリー 6 世」「エドワード 3 世」

バラ戦争として扱われる

19 世紀の歴史学が百年戦争を作り上げる

それも国民国家としてのイギリスと国民国家としてのフ

ランスの戦争←19 世紀が生みだした国民国家戦争の産物

中世において国民国家としてのイギリスも国民国家とし

てのフランスも存在しなかった

イギリス王のエドワード 3 世もフランス王のフィリップ 6

世も一方を近代英語で呼び、他方を近代フランス語でそう呼ぶがゆえに英仏の戦いと理解される原因となっている

しかしプランタジネット家のイギリス王はカペー王家に

連なる一族であり、フランス出身の貴族であり、ノルマン朝

の断絶によって血統に従ってイギリス王になったに過ぎず、フランスに広大な所領を持ち、イギリスを征服者として支配していたということを考えれば、百年戦争を近代的な国民国家の概念でとらえるのは間違っている。

ナショナリズムという言葉が百年戦争を作り出したと言える大きな物語の喪失（国民史からマイクロ・ヒストリーへ、越境する文化史）

文化史（バーク）

文化史とは：基本的には歴史学の一面性に対する批判

人間活動のすべての領域を対象（石田）

日本文化の特徴は文化の連続性・新旧文化の併存・内外の文化の総合化（石田）

言語論的転回以降、文化史は多様化。社会史や人類学、視覚文化論や地理学、考古学と関係（バーク）

（参考）言語論的転回：言葉によって現実は理解される

（ソシュール）

参考文献

石田一良『文化史学の理論と方法』同志社大学出版部、1951年。

E・H・カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』岩波新書、1962年。

ジョージ・P・グーチ（林健太郎・孝子訳）『19世紀の歴史と歴史家たち』（上・下）筑摩書房、1971・74年。

フェルディナン・ド・ソシュール（小林英夫訳）『一般言語学講義』岩波書店、1971年。

ピーター・バーク（長谷川貴彦訳）『文化史学とは何か』法政大学出版局、2010年。

ヘロドトス（松平千秋訳）『歴史』岩波文庫、2007年。

L・v・ランケ（山中謙二訳）『ローマ的・ゲルマン的諸民族史』千代田書房、1948年。